

領域「言葉」の視点から見た和歌山市公立幼稚園における 保育の現状と課題

— ECERSを基にしたアンケート調査から —

A Study on Current Status and Issues of ECEC that Nurtures Words in Wakayama City Public Kindergartens :

From a Questionnaire Survey Based on ECERS

西原 和哉 丁子 かおる
NISHIHARA Kazuya CHOJI Kaoru
(元和歌山市立湊幼稚園) (和歌山大学教育学部)

2020年10月12日受理

Abstract

In recent years, attention has been focused on improving the quality and evaluation of early childhood education and care in those research. In addition, there is a side that it is difficult to catch the education and care in content area “language”. In this study, we conducted a literature survey on evaluation and area “language”, and a questionnaire survey on the education of the area “language” based on “ECERS”, Wakayama City kindergartens. As a result, it was thought that appropriate support was given, such as “promoting lying language” and “being familiar with and using picture books.” However, from the priority of “Child-Centrism”, it was found that there are points that can be improved in “acquisition of vocabulary” and “environment familiar with letters”.

キーワード：領域「言葉」、保育の質、評価、環境構成と援助、語彙拡大、文字に親しむ環境、子ども中心

はじめに

近年の幼児教育・保育における国際的動向として保育の質の向上が一層求められるようになってきている。同時に、その評価や改善にも注目が集まっている。また、保育内容領域「言葉」では、幼児期は生涯にわたる言葉の基礎や、学習の基盤となるにもかかわらず指導を捉えにくい側面がある。そこで、本研究では、保育における評価と領域「言葉」についての意味を捉える文献調査を行う。その後、和歌山市公立幼稚園を対象に評価の一つであるECERSを基にした領域「言葉」の指導と援助について行ったアンケート調査から、領域「言葉」の保育実践に関わる現状の分析と課題を提案する。

1. 幼児教育における動向と保育の質

近年、幼児期からの教育的介入によって非認知的能力や社会情動的スキルの育成が人生の成功につながると思われ、乳幼児期の教育とケア(Early Childhood Education and Care: 以下ECEC)は広範囲の恩恵をもたらすと考えられるようになった¹。

同時に、OECDでは「乳幼児期の教育とケア(ECEC)は、子どもや親、社会全体に広範囲の影響をもたらす

が、その恩恵の程度は「質」いかにかわっている²としており、「保育の質」が子どもたちの将来に大きな影響を与えるといわれるようになった。

「保育の質」とは、多様な国、システム、文化、など考え方によって様々な保育がある中で、例えば、子ども一人当たりの保育者数、保育者の有資格率とレベルの向上、保育技術向上の継続的取り組み、カリキュラムまたは学習基準、小学校への接続、取り組みへの評価など³で計られる質である。つまり、政策、制度、保育者養成と研修、基準となるプログラム、保育の実施など、保育を支える各国の土台からそれがもたらす保育そのものまでを範囲とし、これらが保育の質に影響すると考えられている。

2. 保育の評価

また、保育の質のみならず、保育の質を向上させるために、保育の評価についてもこれまでよりも、注目がされるようになってきている。

埋橋は、保育の質的な面での保証についてサービス内容の最低水準の保持と向上には、保育の質を評価するという行為を伴うとする⁴。「評価は「何を以って良質

の保育とするか」という定義と、「どのように評価するか」という定義と、「どのように評価するか」という方法論とによって構成されている。」とし、実際にサービスの質的水準の維持・向上には評価結果のフィードバックと具体的な改善方法の実行、それを可能とする財政的基盤の確立が必要であり、保育の質の保証は、複数のプロセスを経て実行するものとしている⁵。つまり、保育の評価についても複雑な営みであるため広範囲な視点から取り組む必要があるといえる。

ただし、園や保育者が行う取り組みとしては、日本では以下のような状況がある。文部科学省では「幼児教育の実践の質向上に関する検討会」で令和2年5月に「幼児教育の質の向上について（中間報告）」を公表している⁶。ここでは、幼児教育の重要性と近年の政策の動向を基に、幼児教育の質の向上のための具体的方策について中間報告として方向性が示された⁷。そのうち、「3. 幼児教育の質の評価の促進」として外部の視点を入れた活動の見直し、評価等を通じたPDCAサイクルの構築が重要として、「(3)幼児教育の質の評価に関する手法開発・成果の普及」についても言及している。

また、平成29年に改訂された『幼稚園教育要領』等においては第4節で「指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」として「4. 幼児理解に基づいた評価の実施」の項目が追加され⁸、「幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性、特徴的な姿や伸びつつあるものなどを把握するとともに、教師の指導が適切であったかどうかを把握し、指導の改善に生かすようにすることが大切⁹」と説明する。そこでは、幼児の発達は生活経験や興味によって大きく異なる時期であることを踏まえて、幼児期には子どもの姿を丁寧にとり、一人一人の理解に基づいて指導の改善を行っていくよう促している¹⁰。つまり、国内の幼児教育においては、幼児一人一人に必要な体験を積み重ね、思いを理解し、発達を促す教師の状況に応じた多様な関りが求められ、幼児を理解し、指導の改善を行う、PDCAサイクルが一体となった評価が求められるようになったといえる。

その上で、指導の改善に生かすこと、「評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取り組みを推進するとともに、次年度又は小学校等に適切に引き継がれるようにすること¹¹」が強調された。このように、日本では、子ども理解を深めることと保育を改善することが一体となった評価を、方法としては保育記録やエピソード記録、ドキュメンテーションといった様々な記録を積み重ねていきながら検討を行い、計画的に保育を改善していくことが幼稚園教育要領など¹²によって求められているのが現状である。

ここで、海外の事例から国内で紹介されている評価の方法や評価スケールについても述べておくこととする。評価は保育の質同様に、各国の制度や状況、保育

の捉え方によって様々である。ここで詳細は割愛するが、現在、海外で作成されて国内で紹介されている評価としては、ニュージーランドのLearning Storyの保育記録などを基に評価を作成していく方法、イタリアのレッジョ・エミリアでプロジェクト活動における子どもの思考の活動や思考の流れを視覚的に記録するドキュメンテーション¹³、プロセスの質を評価するLaeversによって開発されたSICS (Self-Involvement Scale for Care Settings: 自己評価尺度)を翻訳し思想をまとめた資料等がある。また、出版されてより広く手に入る量的評価スケールとして第3者が行う評価としてアメリカで制作されたECERS、ECERS-R、ITARSや、イギリスで制作されたSSTEWなどがある。以下、簡単に説明する。

ニュージーランドでは、幼保統合型カリキュラムであるテファリキを基にLearning Storyと呼ばれる保育記録による評価法が行われている¹⁴。「個別具体的で子どもの個々の長所や可能性に焦点を当て」たエピソード記録による評価法である。これは、記録に労力が求められるが、日本国内でも参考となっている。

レッジョ・エミリアのドキュメンテーションは、「ポートフォリオに収められたドキュメントを集めたものであり、記憶、評価、記録のために役立つため、「メモ、観察チャート、日誌やその他、物語の形式を、録音テープ、写真、スライドやビデオテープ」を収集する。それらを基にした視覚的なドキュメンテーションのパネルが、保育者、保護者、子ども達と共有され「コミュニケーションや省察の機会」として、それぞれの立場から活動や学びの過程を視覚的に捉え、討議や交流を支える¹⁵。学びの過程を丁寧捉えた評価といえる。

ベルギーのFerre Laeversによって開発されたSICSは、日本では秋田・小田らによって紹介されている¹⁶。「経験に根ざした保育・教育」という思想に基づいて、「安心度(Well-being)と夢中度(Involvement)の2点から活動の過程・プロセスの質を捉え、評価する。「豊かな環境」「集団の雰囲気」「主体性の発揮」「保育活動の運営」「大人の関わり方」という5つの観点で保育の振り返りを行い、具体的な保育の手立てを考えるとという段階的な省察と協議を行い保育者間で計画につなぐ。

幼児版のECERS、ECERS-R、乳幼児版のITERSは、主に訓練を受けた第3者が保育の構造を指標に沿って量的に評価できる¹⁷。現在は、改善され保育者と子どもの関わりと「関わりを通して育まれる子どもの学びに向かう力」が強調されるようになった¹⁸。そして、量的評価スケールを確立するイギリスではアメリカで開発された保育環境評価スケールであるECERSやECERS-R¹⁹に基づく保育環境、言語環境、活動内容、相互環境等についての評価によってエビデンスを求め、その後、ECERSで不足するとされた保育のプロ

セスの質を点数化して評価するSSTEW²⁰が開発されて利用されている。SSTEWは、「情緒的な安定・安心」(社会情緒的発達)と「ともに考え、深め続けること」(言語的、認知的発達)を支援する保育者の関りに着目した評価スケールである²¹。

以上、保育の評価は、第三者評価スケールから個々の保育者の記録まで、保育及び子どもを対象にするものまで広く活用できるようになってきたが、国内では未だ保育現場に浸透していない現状がある。

次に、領域「言葉」における保育の意味と先行研究による現状について考察をしていく。

3. 言葉の育ちの位置

まず、本研究の中心となる子どもの言葉の育ちについて、その意味や必要性を確認していくこととする。

乳幼児の脳発達の敏感期についてOECD白書では「言葉の発達についての脳の敏感性は、中レベルから始まり、1歳くらいから2歳までに高レベルに増加し、4歳までに少しずつ減じ、さらに中レベル、低レベルへと減じ続ける。」と Council for Early Child Developmentの資料を基に説明する²²。つまり、乳児期が最も敏感な言葉の発達の時期であり、次に幼児期中程度となり、その後は、低下していくため、幼児期は言葉の発達における敏感期であり、児童期以上に重要な時期であるといえる。

ただし、幼児期が敏感期であることは、発達の著しさだけでなく、脳にとってデリケートな時期であり、そのやり方や環境によっては、その後の学びや人生にも影響を与えてしまうことが考えられる。

ここで、言葉が子どもたちに果たす役割について確認する。芦田は、横山の4分類²³に5項目目を追加し役割について5分類で機能を示している²⁴。(1)コミュニケーションの手段としての言葉、(2)認知の手段としての言葉、(3)行動をコントロールする手段としての言葉、(4)自己表現の手段としての言葉、そして、(5)自我の形成と言葉の5つの機能である。(1)のコミュニケーションの手段としては、他者と伝えあい、会話を成立させ、社会的関係を広げる役割、(2)の認知の手段は外界を知覚し言葉を用いて弁別し記憶され、思考を促す手段であるとしている。(3)の行動のコントロールする手段としては、不安な時、危険な時に勇気づけたり、行動を抑制、確認して自分に向けての声かけをするなど行動を支え、コントロールする手段であり、(4)の自己表現の手段としての言葉は、自分の思いや要求の表現である。そして、(5)の自我の形成と言葉は、先の4つの機能を統合し自我の形成に中心的な役割を果たす機能としての言葉である。

特に、言葉による自我の形成は、「そのコミュニケーション能力に、物理的、社会的知識を理解する認知能力が加わり、チャレンジしたり自己規制したりして自

分の行動をコントロールする能力が、行動の範囲を広げ、そのような過程で得たさまざまな知識や感情が他者とのコミュニケーションにおいて交換されるとき、その中央にいる自分、それが自己であり、自分であるということ」として、4つの機能とそれを統合する5つ目の自我の形成を言葉の重要な機能であり役割として位置付けている²⁵。このように、言葉の発達のみならず、言葉は、子どもたちの総合的な発達の基盤を形成する役割を持っているといえる。

また、柴田・大森は、子どもの社会生活能力を評価する6領域で構成される目安表を基に、「言語能力」に関して「作業」「意思交換(=言葉)」「集団参加」「自己統御」の4つの評価領域で保育所の3歳以上の子どもを対象に、この領域で評価相当年齢毎に評価課題と発達の評価目安を設定して、「意思交換(言葉)」の度合いと各活動の通過率から評価結果のデータを分析して関連を調査した。そして、幼児期後期における「意思交換(言葉)領域」の育ちと子どもの成長全般との関連を検討した結果、「言葉領域」での育ちが、「作業」「集団参加」「自己統御」へ影響を及ぼすことを示している²⁶。このデータから、言葉の発達は、子どもの身体的、認知的、非認知的育ちに広く影響があり、様々な能力を促進すると考えることができる。

次に、低年齢の読み書きや読み聞かせのその後の学力への影響について調査する。NIEE(National Institute for Early Education Research)では、基本的な読み書きのリテラシーは、人生の早い段階ですでに始まっており、その後の学校教育におけるすべての教科目の知識獲得手段として重要であるとする。また、口頭での言葉やアルファベット記号、印刷物による知識が読みと学校生活の成功の予測因子となるという²⁷。Dina, C等は、同様に、質の高い保育は、学校への準備となり学校生活の成功につなぎ、特に、(母語の他にもう一つなど)2つの言語を学習するといったマイノリティの子どもへの読みの格差を減らすとしている²⁸。

また、OECDの調査では、子どもが小学校1年生の時点で両親がよく本を読んでくれた生徒は、読んでくれない生徒よりも、15歳時のPISAの得点が高いという結果を示している。その差は、調査14カ国平均で25ポイントであったという²⁹。

以上より、幼児期の言葉の育ちは、脳発達としては敏感期にありながらも、子どもの心身の発達から自己形成に至るまで影響を与え、また、様々な活動の発達を促すという子どもの育ちの側面として重要であることが分かった。加えて、幼児期及び小学校低学年の読み聞かせや読み書きのリテラシーは、その後の子どもたちの様々な教科における学力の基盤となり、影響を与えるという結果も踏まえて、小学校では「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」からなる3領域を思考力・判断力・表現力等としている

ことから、幼児期の言葉の指導と援助については、保育者は、言葉の土台をつくる幼児期ならではの保育として位置づけながら、様々な場面でバランスと見通しを持って行っていくことが必要といえる。

4. 保育内容 領域「言葉」に関わる研究の状況

このように、幼児にとっての言葉や読み書きのリテラシーは、その後の学力に影響があるとされているが、国内における保育内容の領域「言葉」についての専攻研究は、他の領域と比べて少ない³⁰。その上で、南陽は、1990年から2017年までを範囲として研究の種類を分類し調査を行い、実践研究については2008年以降の急増がみられるが、幼児教育・保育現場をフィールドとした実践研究や、子どもや保育者を対象とする研究は子ども(10%)、保育者(8%)、子どもと保育者(3%)と少ないことについて述べている。そして、領域「言葉」に関する「先行研究では、保育内容「言葉」に関する保育実践に直接的に関わるものではなく、その前提となる事柄に間接的に寄与する研究に注力されてきた」と指摘する³¹。

そのような中で、檜森は、平成29年3月の保育所保育指針等の改訂に伴い、その1年半後に改訂の影響、研修、保育実践などについて保育所、子ども園に勤務する保育者10名を対象に半構造化インタビューで保育士を対象に意識調査を行っている³²。その結果、「今回の改訂をきっかけに新たな活動を取り入れるなどは見られなかった」こと、しりとりやかぞえうたなどの言葉遊びも従来から保育現場で親しまれてきた遊びとして取り入れられており改訂の影響はなかったという。ただし、領域「言葉」に関する子どもとの関わりについては、「一人一人の子どもに応じて気持ちを受け止めて言葉で返し、相手に伝えるという過程を繰り返している保育士の援助が多く語られた」という。つまり、言葉の保育については変更がされにくい状況がありながらも、言葉の獲得に関して、単語を覚えるだけでなく、「保育士との丁寧なやり取りを通してその言葉の意味を知りやがて使えるようになる」と考え、0歳児クラスから年長クラスにおいて丁寧な働きかけを行っている³³。この研究では、保育者は保育者との関りの中で言葉の育ちをみていることが分かる。

また、梅田・伊與部は、新潟県内の幼稚園及び保育所4園の保育者・管理職17名を対象に半構造化面接の手法で、「保育者が子どもの言葉の力の育ちについてどうとらえ、どのような援助を意図しているか」を調査している³⁴。その結果、保育者の多くは幼児期の子どもの言葉の力を、先と同様に、コミュニケーションの側面からとらえていることを明らかにしている。「言葉の力」で想起されることとして「言葉以前に大切なことがある」という保育者の回答から、「子どもにとって園が安心感・安定感を持てる場であること」や「保育者

との温かい信頼関係が言葉の力を育てていく基盤と捉えていること」、そして、「様々な経験ができるような環境を準備し、出会えるような状況をつくっていくことも保育者の援助の一部」と捉えていたと述べている³⁵。そして、これは、要領「言葉」におけるねらい「(1)自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。(2)人の言葉や話をよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝えあう喜びを味わう。」の目指されている方向性と重なりあっているとす。また、「話す」と「聞く」では、幼児期の言葉の力の育ちとしては、話す力の育ちがまずは大切との意識を17名中10名が持っていた。梅田・伊與部は、インタビューから、「子どもが表したり話したりしたことを十分に聞いてもらい、受け止められ通い合う嬉しさや楽しさを経験することが基盤となって、相手の話を聞こうとする姿勢が育っていくことの意識がある」として評価する。ただし、「聞く力」については、保育者や周囲で交わされる言葉の環境の大切さと、言葉のやりとりには相手の話をきちんと聞く力の育ちが必要という2通りの捉え方があり、どちらに力点をおくかは園による保育のありようと関連していると指摘している³⁶。

最後に、岡野・大野は、岡山市内の公立幼稚園68園の幼稚園教諭を対象に、アンケート調査を行い、幼稚園の教育現場において言語活動の充実がどの程度意識され、どのように取り組まれているのか、特に伝達力と思考力に関する実践事例に着目して調査を行っている³⁷。その結果、「伝達力の育成を意識した保育の実践について」は、68.4%が意識していると回答があり、「思考力の育成を意識した保育の実践について」は、60%が意識していると回答していた。ただし、小学校との「言語活動の充実」との連携は、55.6%が「行っていない」とし、園独自の領域「言葉」に関わるカリキュラム作成の有無については66.8%が作成を行っていないと回答した。カリキュラムを作成していると回答した園では、39.6%が年間指導計画・月案・週案に含めて作成をしているが、「言葉」のカリキュラムを単独で作成しているが25.8%、その両方が20.6%であった。このように領域「言葉」に関わって、幼児期における言語活動の充実が進んできているとしながらも、小学校との連携・接続を考えた保育の在り方の模索を課題として挙げている³⁸。この研究からは、幼稚園教諭は、伝達や思考力の育成は意識しているものの、カリキュラム化するなど連続的または計画的な視点についてはやや少ないことが分かる。

このようにして、保育内容の領域「言葉」について増えつつあるが、研究は少なく、研究対象も子どもや保育者が実践に関わる研究も少ないことを確認した。また、保育者の援助における意識については、話すこと、聞くことを中心として表現する楽しさや伝えあう喜びを味わえるよう保育者は丁寧に関わろうとしてい

ること、幼稚園の調査では、思考力・伝達力を十分に意識して保育を行いながらもそのカリキュラム化には十分ではないという課題がみられた。以上から、幼児の言葉の指導については、これまでの基本的アプローチは大切にしながらも、保育の質を向上させるカリキュラム化など長期的な視点や広い視野をもたらす保育の評価が求められるといえる。また、評価で重要なのは、評価で客観的な状況を捉え、改善に生かす事、そして、それを自ら継続させていく取り組みである。そのため、本研究では領域「言葉」において保育者自身が評価スケールを基に保育の質の向上について具体的に意識できるように以下に調査を行い結果をまとめ、後に、本研究の成果をもってフィードバックを行うことで、保育の質の向上に役立てることとした。

5. 調査の分析と考察

1) 研究の目的

和歌山市公立幼稚園全園(11園)を対象に領域「言葉」に関する保育者の意識と、指導や援助の状況を明らかにするため、評価スケールであるECERSを基にアンケートを作成し調査を行う。

2) 研究の方法

アンケートは、和歌山市公立幼稚園11園において担任の保育者を対象とし、2020年5月21日に手渡しにて配布、5月22日～6月4日の期間で回収を行い、9園の担任27人から回答を得た。回収率は81%であった(新型コロナウイルスの関係で、調査に影響があったと思われる)。アンケート内容は末尾の資料1に示す。

最初に、質問1. 1)、2)では、質問の前提として、担任学年や保育者としての勤続年数を尋ねた。次に質問1. 3)「領域「言葉」に関する指導や援助において、あなたが困っていることや難しいと感じていることはありますか」として、その内容と度合いについて5件法による5段階(【1. 思わない 2. あまり思わない 3. 普通 4. やや思う 5. 思う】)の中から選択して回答してもらった。

質問2以降の設問は、ECERSを基に作成し、質問2では、幼児に身に付けてもらいたい力として「語彙の拡大」(獲得)、「話し言葉の促進」、「絵本に親しむための環境構成や援助³⁹⁾」、「保育者による絵本の使用」、「文字に親しむこと」のそれぞれについて、大切に思う度合いを先と同じ5段階から選択して回答してもらった。

質問3では、担任自らが、自身の指導や援助について行っている度合いについて5段階(【1. していない 2. あまりしていない 3. 普通 4. ややしている 5. している】)の中から選択して回答してもらった。また、各設問において、最もしている援助について具体的にどういった援助をしているかを自由に記述する欄も設けた。

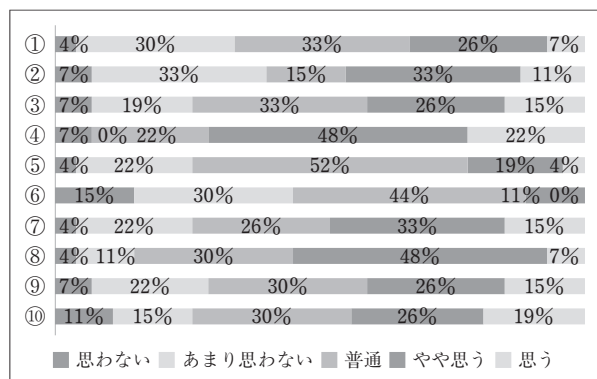
3) 分析と考察

質問1. 1)及び質問1. 2)で、回答者の担任学年は、3歳児、4歳児、5歳児とも9人ずつであった。また、保育者としての勤続年数では、1年未満～5年が5人、5年～10年が5人、10年以上が17人であったことから概ね保育経験があり、経験年数としてはバランスよく回答を得られた。

(1)領域「言葉」に関する指導や援助について

質問1. 3)「領域「言葉」に関する指導や援助において、あなたが困っていることや難しいと感じていることはありますか。」では、「④幼児が、人の話を注意して聞き、相手にわかるように話すことができるようになることの指導や援助」において、「やや思う」(48%)と「思う」(22%)と回答した人の割合が70%であったが、「思わない」(7%)と「あまり思わない」(0%)と回答した人の割合が7%であった。また、「⑧幼児が、いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにすることの指導や援助」において、困っている・難しいと感じている割合は、「やや思う」(48%)と「思う」(7%)と回答した人の割合が55%、「思わない」(4%)と「あまり思わない」(11%)と回答した人の割合が15%と、この2つの設問について指導や援助に困っていたり難しさを感じたりしていることが分かった。その他の設問では、「思わない」「あまり思わない」「普通」と回答した人の割合が「やや思う」「思う」と答えた人の割合を上回った。(図1)

図1 「1. 3) 領域「言葉」に関する指導や援助において、あなたが困っていることや難しいと感じていることはありますか。」回答

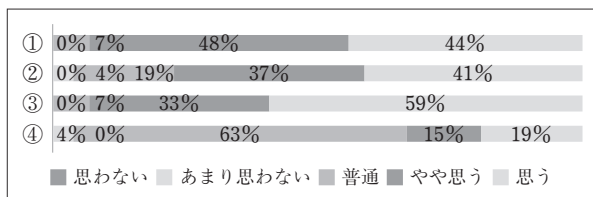


(2)幼児に身に付けてもらいたい力

質問2「幼児に身に付けてもらいたい力の中で、次のうち大切に思う度合いについて、回答欄に当てはまる段階を番号で記入してください。」では、「やや思う」「思う」と答えた人の割合が、「①語彙の拡大(獲得)」92%、「②話し言葉の促進」78%、「③絵本に親しむこと」92%と多かったが、「④文字に親しむこと」については、「普通」と答えた人の割合が63%と最も多く、幼

稚園において文字に親しむことについての認識が浮き彫りとなった。(図2)

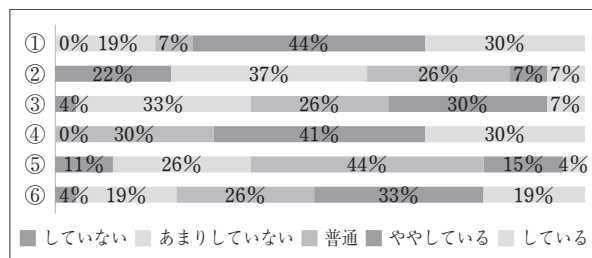
図2 「幼児に身に付けてもらいたい力の中で、大切に思う度合いについて」回答



(3)語彙の拡大

質問3. 1) (1)「幼児が語彙を拡大するために、あなたが普段から行っている援助についてお尋ねします。回答欄に当てはまる段階を番号で記入してください。」では、「②ときどき、幼児にとってなじみのない言葉を使い、その意味を幼児にわかるように説明している。」において「していない」(22%)と「あまりしていない」(37%)と答えた人の割合が59%、「ややしている」(7%)と「している」(7%)と答えた人の割合が14%で、「していない」「あまりしていない」と答えた人の割合が6割であった。また、「③しばしば遊具や用具や掲示などの環境や、幼児の体験といった機会を利用して、新しい言葉を導入するようにしている。」において「していない」(4%)と「あまりしていない」(33%)と答えた人の割合が37%、「ややしている」(30%)「している」(7%)と答えた人の割合が37%で同数であり、「⑤新たな話題や興味のあるトピックを取り入れる際に、いろいろな面白くて新しい言葉を用いるようにしている。」において、「していない」(11%)と「あまりしていない」(26%)と答えた人の割合が37%、「ややしている」(15%)と「している」(4%)と答えた人の割合が19%で、「していない」「あまりしていない」と答えた人の割合を少し上回った(図3)。上記の3つの設問には、「幼児にとってなじみのない言葉」「新しい言葉」というワードが含まれており、それらが影響していると考えられる。自由記述欄では、最もしている援助や指導の具体例として、①「物の名前を具体的に○○ねと言いながら手渡すなどしている。」⑤「ニュースになっていることなどを話すようにしている。」⑥「子供の気付きに対して、その時の気持ちを代弁して付け加えたり、その情景を表現する言葉の種類を増やせる機会になるようにしている。」といった回答がみられた。質問2の回答と合わせてみると、幼児にとって語彙の拡大(獲得)をすることは大切だと感じているが、その指導や援助についてはしていない割合が高く、見直しの余地があるといえる。

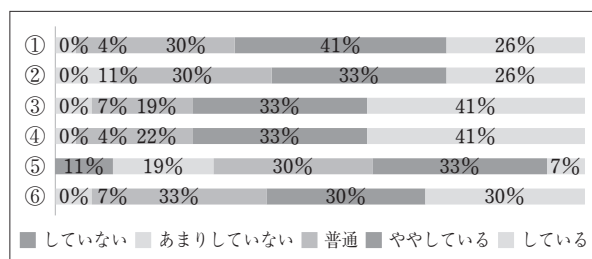
図3 「3. 1) (1)幼児が語彙を拡大するために、あなたが普段から行っている援助についてお尋ねします。」回答



(4)話し言葉の促進

質問3. 2) (1)「幼児の話し言葉を促進するために、あなたが普段から行っている援助についてお尋ねします。回答欄に当てはまる段階を番号で記入してください。」では、①～⑥のすべての設問において、「していない」と「あまりしていない」と答えた人の割合(4%~30%)を「ややしている」と「している」と答えた人の割合(40%~74%)が大きく上回った(図4)。自由記述欄では、最もしている援助や指導の具体例として、②「遊びの中で言葉のやり取りを楽しめるよう、保育者も一緒に会話を楽しむ」③「見つけたものやことから知らせてくれた時には、どこで? どうやって? どんな気持ち? 大きさは? 数は?などを問いかけ、たくさん言葉を引き出せるようにしている。」といった回答がみられた。幼児の話し言葉を促進するための指導や援助は、「ややしている」と「している」と答えた人の割合が40%~74%という高さから充実がみられるが、⑥のように保育者から幼児への質問といった点では、改善の余地はあると思われる。

図4 「3. 2) (1)幼児の話し言葉を促進するために、あなたが普段から行っている援助についてお尋ねします。」回答

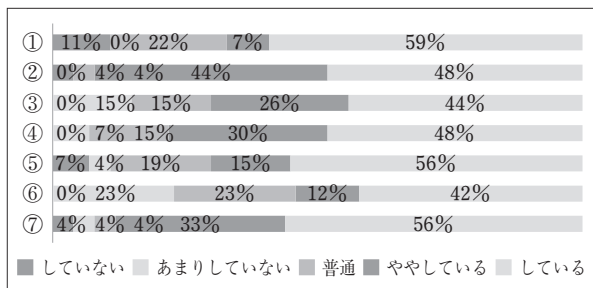


(5)絵本に親しむための環境構成や援助

質問3. 3) (1)「幼児が絵本に親しむための環境構成や援助についてお尋ねします。回答欄に当てはまる段階を番号で記入してください。」では、①～⑦のすべての設問において、「していない」と「あまりしていない」と答えた人の割合(4%~23%)を「ややしている」と「している」と答えた人の割合(54%~92%)が大きく上回った(図5)。自由記述欄では、最もしている援

助や指導の具体例として、②「畳を敷いてゆったりと絵本に親しめる配置や空間を大切にしている。また、子供の興味や関心を見ながら場の配置も考えている」⑦「季節に応じた絵本や行事などの絵本を、表示を付けて幼児に見えるところに並べている」といった回答がみられた。「ややしている」と「している」と答えた人の割合が54%～92%と高く、幼児が絵本に親しむための環境構成の充実に努めている様子がうかがえるが、⑥「少なくとも5冊以上の本が、現在のクラスの活動に関係していて、幼児が自由に手に取れるようにしている。」については「ややしている」と「している」と答えた人の割合が54%で、改善の余地が残されていると思われる。

図5 「3.3) (1)幼児が絵本に親しむための環境構成や援助についてお尋ねします。」回答

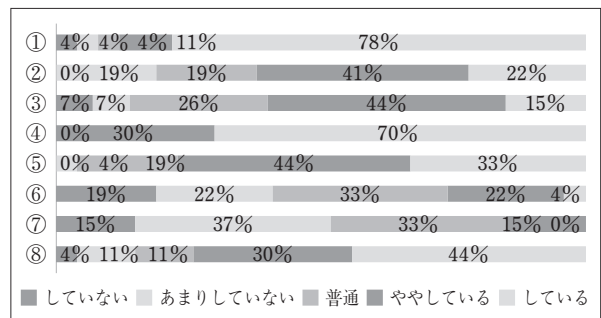


(6)保育者による絵本の使用

質問3.4) (1)「保育者による絵本の使用についてお尋ねします。回答欄に当てはまる段階を番号で記入してください。」では、「①保育時間中にクラス全体や、小グループ、あるいは個人に絵本を読んでいる。」において「している」と「ややしている」で89%や、「④保育者自身が絵本に興味をもち、楽しんでいる。」において、「している」と「ややしている」で100%など、充実した配慮がされていた。ただし、「⑥絵本の内容について保育者との話し合いに、幼児が喜んで参加している。」において、「していない」(19%)と「あまりしていない」(22%)と答えた人の割合が41%、「ややしている」(22%)と「している」(4%)と答えた人の割合が26%、「⑦保育時間中に、2回以上、小グループや個人の幼児に絵本を読んでいる。」において、「していない」(15%)と「あまりしていない」(37%)と答えた人の割合が52%、「ややしている」(15%)と「している」(0%)と答えた人の割合が15%と、「していない」「あまりしていない」と答えた人の割合が、「ややしている」「している」と答えた人の割合を15～37%で上回った(図6)。自由記述欄では、最もしている援助や指導の具体例として、①「1日1冊は落ち着いて絵本を楽しめる時間をとるようにしている。」⑧「捕まえた虫や生き物について、子供と一緒に絵本や図鑑で見たり調べたりしている。」といった回答がみられた。保育者による絵

本の読み聞かせや、遊びの中での絵本の利用などの指導や援助が充実している様子がうかがえる。しかし、保育時間中に2回以上、小グループや個人に対して絵本を読んでいると答えた人が少ないことから、子どもあたりの保育者数の不足を要因とする課題も垣間見える。

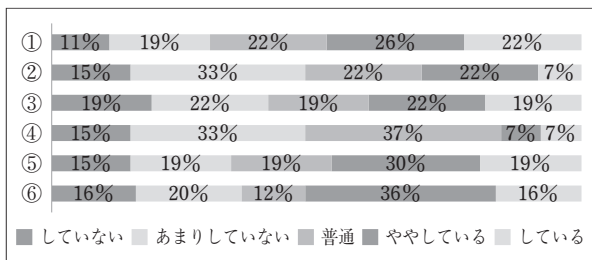
図6 「3.4) (1)保育者による絵本の使用についてお尋ねします。」回答



(7)文字に親しむ環境構成や援助

質問3.5) (1)「印刷(書かれた)文字に親しむ環境構成や援助についてお尋ねします。回答欄に当てはまる段階を番号で記入してください。」では、「②ことさらにについて、方法や理由を説明しながら、文字が便利であることを幼児たちに示すようにしている。(例：おもちゃにラベルをつけたり、幼児が給食を尋ねに来た時に、献立表を指さして読んで見せたりする)」において、「していない」(15%)と「あまりしていない」(33%)と答えた人の割合が48%、「ややしている」(22%)と「している」(7%)と答えた人の割合が29%、「④幼児に興味を持たせながら、幼児の言ったことを書き留めるようにしている。」において、「していない」(15%)と「あまりしていない」(33%)と答えた人の割合が48%、「ややしている」(7%)と「している」(7%)と答えた人の割合が14%と、「していない」「あまりしていない」と答えた人の割合が「ややしている」「している」と答えた人の割合をどちらも3割前後で上回った(図7)。自由記述欄では、最もしている援助や指導の具体例として、「①片付けを行いやすいように文字と写真の表示を付けている。」「③幼児の描いた絵に、名前やその幼児の思い(何を描いたか)などを描くようにしている。」といった回答がみられた。質問2において、幼児が文字に親しむことを大切とする度合いについて「やや思う」「思う」と答えた人の割合が34%にとどまり、また、指導や援助についても「ややしている」「している」と答えた人の平均が39%と少なかったことから、文字がそれほど重要視されていないことが考えられる。

図7 「3.5) (1)印刷(書かれた)文字に親しむ環境構成や援助についてお尋ねします。」回答



6. 結果

和歌山市公立幼稚園では、幼児が自ら身近な環境にかかわり、主体的に活動する保育を重視しているために、第一著者である筆者の経験からも、環境の充実を図ろうとする意識は高いが、保育者が新しいことを幼児に教えたり、保育者主導で課題を設定した保育を行ったりすることに対して若干の抵抗感があるといえる。それは、幼児にとって新しい言葉や意味を取り入れたり、保育者が方法や理由を説明したりするといった設問において、「していない」「あまりしていない」と答えた人の割合がそれぞれ、質問3.1) (1)②は59%、③は37%、⑤は37%、質問3.5) (1)②は48%と比較的に多かったが、質問3.3) (1)「絵本に親しむための環境構成や援助」では、すべての質問項目において、「していない」「あまりしていない」と答えた人の割合の平均が「ややしている」「している」と答えた人の割合の平均を上回ったことから明らかになった。

その理由として、幼稚園教育要領において、幼児期の教育は幼児期の特性を踏まえて環境を通して行うことを基本としていることや、保育者が幼児の主体的な活動を確保するよう計画的に環境を構成しなければならない旨が記されており、それを重視し優先した保育が行われていることがある。また、質問2「幼児に身に付けてもらいたい力」の中で、「やや思う」「思う」と答えた人の割合がそれぞれ「①語彙の拡大(獲得)」が92%、「②話し言葉の促進」が78%、「③絵本に親しむこと」が92%と多かったが、反して「④文字に親しむこと」については、「普通」と答えた人割合が63%と多い結果となったのも、同様の要因と考えられる。文字に対して興味や関心の度合いが幼児にとって様々であるため、幼児が文字に対して興味や関心をもっていない場合、とりたてて保育者が文字を教える必要がないといった思いを優先していると考えられる。

以上のことから、和歌山市公立幼稚園では、幼稚園教育要領を前提に、保育環境を充実させ、幼児の主体的な活動を促しながら保育を行っている様子があった。ただし、ECERSの評価の観点からは、話し言葉を促進する援助や、幼児が絵本に親しむための環境構成や援助では、概ね充実した援助がされていたが、幼児の主体的な活動を重視しようとするあまり、語彙を広げ、

文字に親しむための環境を整えるなどの保育者の指導や援助が少なくなっているといえる。幼児の興味や関心に基づいた活動を中心に展開していく幼稚園教育の難しい部分ではあるが、保育者も環境の一つであると考え、幼児の主体的な活動を促しつつ、幼児の興味や関心の幅を広げられるような保育者の役割を踏まえた保育も模索していく必要があると考える。また、このことは、子ども中心の保育を行っている国内の多くの園においても共通の課題となる可能性がある。

7. おわりに

領域「言葉」に関する幼児の活動や成長については、それが幼児自身の発達によるものか、保育者の指導や援助による教育効果によるものか曖昧な面があるのが実状である。言葉は人が生活している上で欠くことのできないもので、集団生活ともなればさらにその必要がある。幼児教育施設では、日常的に挨拶を交わすし、集まって保育者や友達の話聞くこともある。友達と一緒に遊ぶ中で自分の思いや考えを友達に伝えたり、感じたり考えたりしたことをつぶやいたり保育者に伝えたりすることもある。もともと幼稚園にある環境として、子供が喜ぶような絵本が置いてあったり、掲示などに文字を使ったりしている幼稚園も多い。つまり、保育者の意図にかかわらず、幼児の自発的な活動に任せていたとしても、ある程度は領域「言葉」に関する活動は行われており、その上で保育者はねらいを持って保育を行う。その時、その指導や援助が幼稚園教育要領に基づいて行われているかを考える必要がある。

また、今回の幼稚園教育要領の改訂では、ねらい(3)に「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」となり、内容の取扱いに(4)「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを扱う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」として、下線部が追加された。幼児教育施設におけるこれまでの基本的な保育に加えて、幼児が言葉に対する感覚を豊かにできるような指導や援助の在り方が求められている。そのため、幼児の発達の状況や経験していることから得る学びなどの幼児理解を深め、PDCAサイクルに基づいた保育の展開がさらに求められているといえよう。今回はECERSを基にアンケートを作成し、保育者が自身の保育を5段階で評価をするという調査を行ったが、第3者による評価も積極的に取り入れることで保育の質の向上が図れると考える。

幼稚園教育要領の意図するところをしっかりと読み解き、評価の視点を取り入れる事で、保育者間で話し合いながら、幼児にとって望ましい指導や援助ができ

るような体制を充実させていくことで、さらなる質の向上につながる継続的な検討が必要であるといえる。

本研究は、研究全体の構想及び調査の準備・検討など、協働で行ってきた。その上で、1～4については

第二著者が、アンケート調査と分析から5～6を第一著者が担当し執筆している。最後にアンケートにご協力いただきました和歌山市公立幼稚園の先生方に感謝を申し上げます。

資料1 アンケート内容

1.1) あなたが担任をしているのは何歳児クラスですか。当てはまる番号に丸を記入してください。
①3歳児クラス ②4歳児クラス ③5歳児クラス
1.2) あなたの保育者としての勤続年数は何年ですか。当てはまる番号に丸を記入してください。
①1年未満～5年 ②5年～10年 ③10年以上
1.3) 領域「言葉」に関する指導や援助において、あなたが困っていることや難しいと感じていることはありませんか。回答欄に当てはまる段階を番号から記入してください。 【1. 思わない 2. あまり思わない 3. 普通 4. やや思う 5. 思う】
①幼児が、先生や友達の言葉や話に興味や関心を持ち、親しみを持って聞いたり、話したりすることの指導や援助 ②幼児が、自分なりの言葉で、したことや感じたことを言葉で表現できるようにすることの指導や援助 ③幼児が、したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、わからないことを尋ねたりできるようにすることの指導や援助 ④幼児が、人の話を注意して聞き、相手にわかるように話すことができるようになることの指導や援助 ⑤幼児が、生活の中で必要な言葉が分かり、使えるようにすることの指導や援助 ⑥幼児が、親しみをもって日常の挨拶をできるようにすることの指導や援助 ⑦幼児が、生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付けるようにすることの指導や援助 ⑧幼児が、いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにすることの指導や援助 ⑨幼児が、絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、創造する楽しさを味わえるようにすることの指導や援助 ⑩幼児が、日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わえるようにすることの指導や援助
2. 幼児に身に付けてもらいたい力の中で、次のうち大切に思う度合いについて、回答欄に当てはまる段階を番号で記入してください。 【1. 思わない 2. あまり思わない 3. 普通 4. やや思う 5. 思う】
①語彙の拡大(獲得) ②話し言葉の促進 ③絵本に親しむこと ④文字に親しむこと
3.1) 幼児が語彙を拡大するために、あなたが普段から行っている援助についてお尋ねします。回答欄に当てはまる段階を番号で記入してください。 【1. していない 2. あまりしていない 3. 普通 4. ややしている 5. している】
①人々や場所、物事、動きなどの幼児が経験していることを表す言葉をしばしば場に即して用いるようにしている。(例：幼児が使ったものの名前を言う、幼児のとった動きを表す言葉を用いるなど) ②ときどき、幼児にとってなじみのない言葉を使い、その意味を幼児にわかるように説明している。 ③しばしば遊具や用具や掲示などの環境や、幼児の体験といった機会を利用して、新しい言葉を導入するようにしている。 ④幼児の年齢や能力に応じて、語彙豊かに、的確な言葉を用いるようにしている。(例：「うれしい」だけでなく「うきうきする」といった言葉を使ったり、「緑」だけでなく「黄緑」や「青緑」などと言ったりする) ⑤新たな話題や興味のあるトピックを取り入れる際に、いろいろな面白くて新しい言葉を用いるようにしている。 ⑥幼児が使っている言葉の意味についての理解を広げるために、保育者からも情報やアイデアを付け加えるようにしている。(例：幼児が「トラック見た!」と言ったときに、「トラック見たの」と反復するだけや、「赤いトラックだね」と少しの情報を付け加えるだけでなく、たくさんの情報を与えながら応答や質問をしている。)
3.2) 幼児の話し言葉を促進するために、あなたが普段から行っている援助についてお尋ねします。回答欄に当てはまる段階を番号で記入してください。 【1. していない 2. あまりしていない 3. 普通 4. ややしている 5. している】

①幼児が喜んで答えられるような質問をする。 ②遊びの中で、幼児とたくさん会話をするようにしている。 ③幼児からの話しかけに肯定的に応答し、もっと話せるように励ましている。(例：幼児ができるだけ長く話せるように興味をもって聞く、幼児が言いたいことを話せるように言葉を補う、など) ④幼児たちが互いにやりとりできるように助けている。 ⑤幼児がより長く答えられるような質問をたくさんしている。(例：「なぜ」「もし～だったら」「～について話して」などの質問) ⑥クラスでの活動や教材などの範囲を超えての話題を取り入れている。(例：家族についての話や園以外での出来事の話など)
3.3) 幼児が絵本に親しむための環境構成や援助についてお尋ねします。(1) す。回答欄に当てはまる段階を番号で記入してください。 【1. していない 2. あまりしていない 3. 普通 4. ややしている 5. している】
①幼児の人数よりも倍以上の数の本がクラスにあり、自由に読める時間をとれるようにしている。 ②くつろいで読む、コーナーがあるなど、幼児が手に取った本に興味をもてるようにしている。 ③絵本コーナーが構成されており、敷物やクッション、椅子などがおかれてくつろいで読めるようにしている。 ④幼児が自分で本を選ぶことに積極的に配慮をしている。 ⑤自然や科学、人物、感情、文化、スポーツ、人種、男女、仕事、健康など、いろいろな分野の本を置いてある、幼児が自由に手に取れるようにしている。 ⑥少なくとも5冊以上の本が、現在のクラスの活動に関係していて、幼児が自由に手に取れるようにしている。 ⑦幼児が親しめるように絵本を配置するようにしている。(例：棚に詰め込んでいない、本の表紙を見やすく置いているなど)
3.4) 保育者による絵本の使用についてお尋ねします。回答欄に当てはまる段階を番号で記入してください。 【1. していない 2. あまりしていない 3. 普通 4. ややしている 5. している】
①保育時間中にクラス全体や、小グループ、あるいは個人に絵本を読んでいる。 ②絵本の読み(聞かせ)の時間に、特別な配慮が必要な幼児に対して手立てをとっている。(例：発達の遅れがあり言葉がうまく使えない幼児、あるいは集団になじめない幼児には小グループで行うなど) ③絵本の読み(聞かせ)の時間に、すべての幼児が喜んで参加している。 ④保育者自身が絵本に興味をもち、楽しんでいる。 ⑤現在のクラスの活動やテーマに即した本を読んだり、幼児が使ったりするようにしている。 ⑥絵本の内容について保育者との話し合いに、幼児が喜んで参加している。 ⑦保育時間中に、2回以上、小グループや個人の幼児に絵本を読んでいる。 ⑧幼児が興味をもっていることに対して、疑問を明らかにしたり、情報を得たりするために、一緒に絵本を見る。
3.5) 印刷(書かれた)文字に親しむ環境構成や援助についてお尋ねします。(1) す。回答欄に当てはまる段階を番号で記入してください。 【1. していない 2. あまりしていない 3. 普通 4. ややしている 5. している】
①室内や戸外にある文字のほとんどを絵や写真などと結びつくようにしている。 ②ことからについて、方法や理由を説明しながら、文字が便利であることを幼児たちに示すようにしている。(例：おもちゃにラベルをつけたり、幼児が給食を尋ねに来た時に、献立表を指さして読んで見せたりする) ③幼児が言ったことを書き留めたり、文字が書ける幼児には自分で書くように促したりしている。(例：幼児が自分でつくった物について言ったことを保育者が書いたり、記録したり、興味のある子どもが自分の絵本をつくるなど) ④幼児に興味を持たせながら、幼児の言ったことを書き留めるようにしている。 ⑤保育者が何か活字を読むときには、その文字や言葉を指さしながら読み、幼児に興味をもたせながら文字や言葉の音聞き取れるようにしている。 ⑥幼児の活動の順番を示すために、絵と言葉による指示を使うようにしている。(例：正しい手の洗い方、栽培物の種のまき方など)

注

- 1 ジェームズ・J・ヘックマン『幼児教育の経済学』東洋経済新報社, 2015
- 2 OECD『OECD 保育の質向上白書 人生の始まりこそ力強く: ECECのツールボックス』明石書店, 2019, p.15 (*Starting Strong III (2012)* 日本語版)
- 3 同上
- 4 埋橋玲子「イギリスにおける「保育の質」の保証: 一保育環境評価スケール(ECERS-R)の位置づけに注目して一」『保育学研究』42(2), 日本保育学会, 2004, pp.196-204.
- 5 同上
- 6 文部科学省; https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/140/mext_00385.html, 2020.9.11現在
- 7 同上。また、1. 幼児教育の内容・方法の改善・充実の(2)小学校教育との円滑な接続の推進では、幼児教育施設全体で行うとしながらも、「公立幼稚園については、小学校教育との接続に関する知見を生かし、地域における幼小連携・接続の中核的な役割を担うことが期待される。」とされている。
- 8 文部科学省『幼稚園教育要領解説』2018, p.121-123
- 9 同上
- 10 同上
- 11 同上
- 12 厚生労働省『保育所保育指針解説』2018, pp.53-59
- 13 『子どもたちの100の言葉ーレッチョ・エミリアの幼児教育』C.エドワーズ, L.ガンディーニ, G.フォアマン, 世織書店, 2001, pp.169-190.
- 14 マーガレット・カー『保育の場で子どもの学びをアセスメントする「学びの物語」アプローチの理論と実践』ひとなる書房, 2013
- 15 C.エドワーズら, 前掲書13
- 16 (Self-Involvement Scale for Care Settings: 自己評価尺度)で、『子どもの経験から振り返る保育プロセスー明日のより良い保育のために一』『保育プロセスの質』研究プロジェクト, 幼児教育映像制作委員会, 2012を参照。
- 17 鈴木正敏「幼児教育・保育をめぐる国際的動向ーOECDの視点から見た保育の質の向上と保育政策」『教育学研究』第81巻第4号, 日本教育学会2014, pp.78-90.
- 18 ECERS(Early Childhood Environment Rating Scale)でECERS-3の日本語訳。『新・保育環境評価スケール①(3歳以上)』テルマ・ハームス, リチャードM.クリフォード, デビィ・クレア, 法律文化社, 2016, ITERS(Infant/Toddler Environment Rating Scale)で3歳児未満児の集団保育の質を測定するITERS-3の日本語訳である。『新・保育環境評価スケール②(0・1・2歳)』テルマ・ハームス, デビィ・クレア, リチャードM.クリフォード, ノリーン・イエゼジャン, 法律文化社, 2018, ECERS-E(The Four Curricular Subscales Extension to the Early Childhood Environment Rating Scale(ECERS)4th Edition with Planning Notes), 『新・保育環境評価スケール③ 考える力』キャシー シルバー, イラム シラージ, プレンダ タカート, 法律文化社, 2018.
- 19 同上
- 20 『「保育プロセスの質」評価スケール』イラム・シラージ, デニス・キングストン, エドワード・メルウィッシュ明石書店, 2016.
- 21 井口眞美「「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保育の質向上に活かすために」『実践女子大学生生活科学部紀要』第57号, 2020, pp.19-36
- 22 OECD前掲書2, p.101.
- 23 横山正幸『乳幼児の言語指導』北大路書房, 1979, pp.2-8.
- 24 小田豊・芦田宏『新 保育ライブラリ 保育内容 言葉 保育の内容・方法を知る』北大路書房, 2013, pp.4-8.
- 25 同上
- 26 柴田長生・大森弘子「幼児期後期における「言葉領域」の発達と、子どもの成長全般への関連についてーよりよい保育実践の視座を得るために一」『臨床心理学部研究報告』第11集, 京都文教大学, 2018, pp.3-16.
- 27 Dorothy S. Strickland and Shannon Riley-Ayers, NIEER” Early Literacy: Policy and Practice in the Preschool Years by” *Preschool Policy Brief*, 2006, New Jersey,
- 28 Dina C.Castro, mariela M.Paez, David K.Dickinson, and Ellen Frede” Promoting Language and Literacy in Young Dual Language Learners: Reserch, Practice, and Policy” *The Society for Reserch in Child Devepolment, CHILD DEVELOPMENT PERSPECTIVES, Vol.5. No.1, 2011, pp.15-21,*
- 29 OECD, PISA in Focus Nr.10: What can parents do to help their children succeed in school?, OECD, 2011, Paris
- 30 檜森恵美「熟練保育士における領域「言葉」に関する意識調査」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』第54号, 2019, pp.79-80
- 31 南陽慶子「保育内容「言葉」に関する研究の動向と特質」『子ども教育宝仙大学紀要』9(1), 2017, pp.13-23.
- 32 檜森恵美前掲書30
- 33 同上
- 34 梅田優子・伊與部ベサニー「言葉の力の育ちに関する保育者の意識について」『人間生活学研究』第5号, 新潟人間活学会, 2014, pp.53-62.
- 35 同上
- 36 同上
- 37 岡野聡子・大野鈴子「幼児期における「言語活動の充実」に関する研究」環太平洋大学研究紀要(6), 2012, pp.19-26.
- 38 同上
- 39 ECERS-3では、「絵本に親しむ環境」としているが、本研究では、「幼児が絵本に親しむための環境構成や援助」として援助についても焦点化して尋ねている。